

カトリック 仙台教区報

2015年3月1日

No.222

発行

カトリック仙台司教区

〒980-0014

仙台市青葉区本町 1-2-12

Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

URL <http://sendai.catholic.jp/>

東日本大震災から4年

忘れない！

仙台教区サポーターセンター 小松 史朗

人間の悩みや不安は何処から来るのか？ これからどうなるのか解らないことへの不安。その不安から、進むべき方向が定まらない悩み。その繰り返しの中で、決して良い方へ向かうことが無いとのあきらめから希望が絶たれる。

2011年3月11日から丸4年の日々。1460日は途方もなく長い時の連なり。

振り返れば、被災した方々の1460日は不安に始まり、不安の只中を生き続ける営みではなかったか？ すべてを失い、言われるままに避難所に行き、今朝は一緒に朝食を食べたはずの家族の安否が解らない不安。これから自分はどのようなのか？ 自分の住んでいた処はどうなってしまったのか？ 解らない不安。

一日、また一日と日を重ねるたびに解ってることが押し寄せる。それは耳を疑う聞きたくもない言葉が大半であり、解った故に解らなくなったことへの不安を新たに掻き立てる。

亡くなった家族と対面し、その事実を無理やり受け止め、今度ほどの様に叩いたら良いのか？ 不安になる。残されたものとして精一杯のことはしてあ

げたい、しかしどの様にすればと？

ひと月、またひと月と日を重ね、解らない不安は、受け止めざるを得ない現実として新たな不安を呼んで来る。精一杯やっている行政に反して、仮設住宅の建設が遅れている、



支援活動に励むカリタスのボランティア

射能からくる風評の被害等々。ありようの一つひとつに不安の種は付いてまわる。家族の中でも意見が分かれ、猜疑心の中で喘いでいる。そして、その一部始終を子どもたちは傷む小さな心で受け止めざるを得ない。そんな中でまた新たに、国からのその場凌ぎの決定に住民のつなぐりは断ち切れ、残るのは不安と徒労と虚しさ。

3年、また1年が過ぎ、5年目を迎える今。復興住宅へと移り始める時期を迎え、新しい人とのつながりは出来るのか解らない不安。近所の仮設住宅の一室で、独りきりで死を迎えた方の死から自らはどのようなのかとの不安。

千年に一度の大災害はこれからも被災者の生活の不安を軽減することなく、次々と新たな不安を生む。人間は、誰でも、何処に住んでいても、どの様な生き方をしても不安は尽きることが無い。ましてや被災地では震災に関連しての不安は言うに及ばずである。

カトリック教会は、この四年間、不安を持つ人々とともに歩んできた。祈りに始まり、救援物資、義援金、そして支援活動、どの活動もその根底には「神はともにいて下さること」の体現であった。そして、これからはあり続ける。何故ならばその一点にしか希望は無い。

生命の泉

去る1月20日午前8時、首相のもとに過激派組織「イスラム国」から日本人2人を人質にしたとの情報が入ってから、30日の後藤健二氏の処刑まで、日本中の耳目を一点に集めた。その推移を固唾を呑んで見守ってきた。その間に、日本人が予想したこととはことごとく外れた▼首相は「人命尊重を第一に交渉にあたる」と怒りを込めて発言したが「人命」とは私たちの耳には湯川さんと後藤さんの命と聞こえた。力が及ばないにしても、ヨルダン国軍パイロットやイスラム国の女性死刑囚もいた。彼らの存在を知った時から容易に解けないと予想できた▼2億ドルの要求は冗談だったのだろうか。「人命は地球より重い」などと言うが、しかし邦貨で230億と聞けば誰しも冗談と思うか、何かほかの意図があるのではないかと思つたに違いない。失礼ながら、2人の男の命としては法外だ。このことは「地球より重い」というのは単なる言葉だと暴いた▼私の少ない砂漠での経験から学んだこととして、そこで暮らす人々の生活は極端に質素だ。持っている什器は必要最低限だ。彼らは物に値段などつけない。自分にとって必要な物か否かで判断する。必要なものを買う時の交渉はしたたかだ。価格はその時に決まる。私たちにはバランスが取れていないように思えても等価の交換だ。マタイ福音書に良い真珠を見つけて「持ち物をすっかり売り払って買う」(18・45)商人の話を思い起こさせる▼先にヨルダン軍パイロットが焼殺刑に処せられたという。人質の扱いにその集団の性格がよく現れている▼様々な宗教の関係者はこの難問を話し合いで解決を図ろうと努めなければならぬ。それだけに信じている神は唯一絶対でも、人間の考え方も行いも相対的なものでしかないのだから。

2014年度 仙台教区研修会

「集会祭儀について学ぶ」

講師 森田直樹神父

仙台教区宣教司牧評議会主催の2014年度研修会は、青森県、岩手県、福島県ですでに実施された。2月11日（水・建国記念日）に、元寺小路教会において第5地区、第6地区合同で行われ、全て完了した。

司祭不在の主日の集会祭儀について、まず、主日とは何か。主日とは、キリストの死と復活を祝う日で、通常はミサ（感謝の祭儀が行われる。

主日の祝い方は紀元54年ころ

てから感謝の祭儀を行っていた。紀元150年頃には、これに、聖書を読むことと、それに基づき、実践するよう



司祭不在とは、長期間にわたって不在であり、しかもよそから司祭の応援を得られない場合であって、今日は司祭が出席しているから集会祭儀と言うものではない。

に書かれた、コリント（11・17〜26）には、共同体の食事（アガペ）を伴って行われ、紀元90年代の使徒言行録2・41〜47）では、相互の交わりと、パンを裂くこと。紀元100年頃には、

に励ますこと（説教が加わった。こうして、今のミサの形に近いものとなった。

私たち信徒は、主日に、教会から招かれ、共同体として感謝の祭儀を行うのであって、自分の満足のために集まるのではない。

集会祭儀は、緊急事態であり、ミサの代わりにはならないから、ミサが行われている近くの教会に行くことが通常である。

- 3・1 ⑩ 聖ウルスラ学院英智
2 ⑨ 青森明の星高校
3 ⑧ カリタス釜石
5 ⑦ 会津若松サベリ才学園
7 ⑥ 宣教司牧評・役員会
10 ⑤ 司祭評・役員会・司祭団・役
11 ④ 東日本大震災記念 亘理教会
12 ③ 部落差別人権委・事務局会議
13 ② 教区財政問題評議会
14 ① いのちの光3・11フクシマ
16 ① 長崎信徒発見150年記念行事
18 ① アドリミナ
28 ① 帰国
29 ① 受難の主日
31 ① 教区責任役員会

4・1 ① 聖香油ミサ

- 2 ① 主の晩餐
3 ① 主の受難
4 ① 復活徹夜祭
5 ① 主の復活
9 ① 人権を考える委員会
10 ① 仙台教区サポーター会議（仙台）
11 ① 日本カト・ボラ連絡協
第12回総会・宮城大会

四旬節にあたって

平賀 徹夫



2月18日の灰の水曜日から四旬節に入りました。復活徹夜祭で洗礼を受ける洗礼志願者の最終的な準備期間、また、洗礼志願者と共にすべての信者が祈りと犠牲と愛の行いを積み重ねながら、教会の典礼で最も大切な主の復活祭（今年は4月5日）を迎える準備をする期間です。

四旬節のテーマは「回心」。父である神を知らず自分の人間的な考えに従っていたときの生き方ではなく、キリストとつながって「何よりもまず、神の国と神の義を求め（マタイ6・33）」ことを第一とする生き方への、姿勢の転換です。この回心は、「わたしは悪を行い、罪を犯しました。悔い改めて心を入れ替えます」という個人の内的なレベルにとどまることなく、フランシスコ教皇が使徒的勧告『福音の喜び』で呼びかけているように、「すべての共同体が司牧的かつ宣教的な回心への道を進むために…地上のすべての地域で、たえず宣教中であることを目指し（25番）」たものであることが期待されるという性質のものです。つまり、回心は共同体的レベルへと広がり、共同体（教会）が絶えず新しくされること（刷新）を通して、「旅する教会は…本性上宣教的である（『教会の宣教活動に関する教令』2）」ということがおのずと現われる、ということにつながります。

回心の業に励んで生きる一番の動機は何でしょうか。それはキリスト教信仰の基礎、福音の神髄である「死んで復活したイエス・キリストにおいて現わされる、救いをもたらす神の愛の美です（『福音の喜び』36）」。これこそ「もっとも美しいもの、もっとも偉大なもの、もっとも魅力的でもっとも必要なもの（同35）」で、わたしたちキリスト信者はこれを、神の愛の霊・聖霊の助けのもとに、啓示された真理の核心として受けとめ、信仰・希望・愛をもって生きるための源泉とするのです。

四旬節にあたって、何よりも重要なものである「愛の実践を伴う信仰」により、心のうちにもたらされる聖霊の恵みを目に見えるかたちで表すもっとも完全な行為である隣人愛（同37）を心掛けたいと思います。

信徒は、洗礼に基づく共通祭司職で、集会祭儀の中で聖書の朗読、すすめのことばを行う奉仕をする。さらに、司教、または司祭の任命を受けて、集会祭儀の司式、ご聖体を配る奉仕が出来る。すすめのことばは、みことばを聞いて味わい、それによって生活をより良いものにするようすすめ、励ますもので、その日のテーマにそった司祭の説教や書物を朗読することも考えられる。

参加者は、森田神父の分かりやすい説明と、ユーモアに満ちた話に魅了され、時間の過ぎるのを忘れて聞き入っていた。

司教日程

3月・4月

ユスト 高山右近 殉教400年

マニラからタグレ枢機卿来仙

フィリピン出身の信徒と共に被災者のためにミサ

ルイス・アントニオ・タグレ枢機卿が2月1日(日)来仙し、18時から元寺小路教会で平賀司教と9名の司祭と共に東日本大震災被災者の復興を願うミサをささげた。ミサには、およそ300人が参加



そのうち教区内のフィリピン出身の信徒200余人が集まり、英語でささげられたミサの中で、ギターの伴奏による聖歌や、聖書朗読、共同祈願、奉納などの奉仕を行い、ミサを盛り上げた。

タグレ枢機卿は、説教で「フィリピンと日本は、どちらも大地震や、強い台風などによる痛み、悲しみ、そして希望をも共通に抱いています」と、前置きして、この日の福音に基づく「神の権威」について話し、「現代では、イエスよりもお金の方が権威があり、コマ

ーシャルが私たちにとって権威を持っているようです。私たちは、イエスの権威を心の中に、生活の中にしみこんでいますか。日々の生活の中でまずイエスを中心にしなければなりません」と、ユーモアを交えて話され、会場から時折笑い声があふれた。

派遣の祝福の後、ミサに参加した全員がタグレ枢機卿を囲んで記念写真を撮った。

タグレ枢機卿は、翌2日には、東京カテドラルで、フィリピン出身の信徒とミサをささげ、3日には、神戸文化ホール大ホールで行われる高山右近殉教400年記念ミサに来賓として出席された。



ミサ後祭壇前での記念撮影

右近は「人はみな平等」という福音の視点に立つ治世を実施し、とくに貧しい人々を慈しむ心は為政者の基本と心得ていた。人の上に立つ者として、慈しむ心、「ごたいせつにする心」を何よりも大事にした。

⑥右近の霊性の特徴は「誠実と賢明」である

右近の霊性の最大の特徴は誠実さと賢明さであり、彼に調和のとれた教会感覚をもたらした。

その人柄に引かれて、たくさんの武将が教会の門をくぐった。

調和のとれた教会感覚で、極端に保守的になったり、極端に進歩的になったりすることなく、教会のあるべき姿を保ち続けることを身に付けていた。

⑦右近が行く先々に教会共同体が生まれた

右近の追放はかえって教会の発展へとつながった。明石、金沢と右近が移り住む先々の土地に教会が立ち、発展していった。

⑧家庭の絆を信仰に置いた

孫たちに残した右近の遺言には、何よりも肝心なのは信仰を大切に、する家庭を築くことだとの信念が表れている。家族の絆をつくるのは信仰だとの確固たる信念があった。

(列聖列福特別委員会 編
「現代にひびく右近の霊性」より抜粋)

現代にひびく 右近の霊性

2月4日は、右近が流刑の地マニラで殉教した日。今年で400年になる。

日本カトリック司教団は、右近の列聖列福に向けた運動を展開し、すでに教皇庁列聖省に申請の手続きを終えた。今年中には、教皇の採択が下りるものと期待される。

右近は、1552年(天文21年)に現在の大府豊能町にある沢城に生まれ、1564年(永禄7年)12歳の時、一家と共に洗礼を受けた。洗礼名はユスト(ポルトガル語で「正義の人」の意)。



戦国大名として織田信長、豊臣秀吉、前田利家らに仕えたが、1614年(慶長19年)、徳川家康によるキリシタン国外追放令を受けて、長崎から家族と共に12月にマニラに到着。フィリピン総督から大歓迎を受けたが、船旅の疲れや慣れない気候のため老齢のために病を得て、1615年2月4日に息を引き取った。64歳。

右近の霊性

①幾多の試練を生き抜いた殉教者

右近の生涯は試練の連続であり、地位も名誉も、国も栄達も失う中で、キリストの福音に従う道を生きた。

気骨ある生き方の中で、人生にかかわる重大な選択を迫られた時、福音を何より大切にすることを、身をもって証した。

②時とともに成熟した信仰

一つ一つの試練を乗り越えるごとに、右近の信仰は成熟していった。確固とした信念が右近のうちに形成されていった。

③右近は教会の良心であった

右近は、教会の指導者の近くにいたために、教会の方向性を見極め、かじ取りをするうえで大きな役割を担い、いわば教会の良心になったと言える。

④日本文化を大切にし、キリスト教を日本の土壌で開花させることに努めた

右近は、千利休の七人の高弟の一人であり、千利休を含め、多くの弟子たちにキリストを伝え、キリスト教に導いた。当時の宣教師ロドリゲスは、右近の茶室は祈りの間であり、茶を通して友と人生を語り、信仰を語ったと述べている。さらに書道、絵画、詩歌と多才な能力を発揮し、日本文化とキリスト教を融合させるよう努めた。

⑤「ごたいせつ」の心を実践した

「ごたいせつ」とは神の愛(カルタス)を意味し、当時の教会はその実践に力を注いでいた。

人権を考える委員会 司教に答申書

仙台教区におけるハンセン病問題について

ハンセン病に生きた人々をわすれないために
カトリック仙台教区が今後取り組みむべきこと

カトリック仙台司教区人権を考える委員会(委員長 園部英俊)では、2015年1月22日付で、司教に答申書を提出した。同委員会は、2007年11月に当時の司教協議会部落問題委員会が仙台で開催したシンポジウム「ハンセン病とカトリック」をきっかけに、2008年8月に平賀司教から諮問を受け、ハンセン病問題に取り組んだ。本誌でも、たびたび同委員会から提供された記事を掲載してきた。今回の答申内容についての報告が寄せられた。

日本ではハンセン病にかかった方々に対し、強制的な生涯隔離を目的にした国の誤った政策が、差別と偏見を生み、本人や家族に大きな苦しみを与えてきました。1996年になり「らい予防法」が廃止され、2001年の裁判で国が責任を認め謝罪しました。20

神は愛なり(4)

滝田 十和男

青森の本町教会に、本部を置いたケベック宣教会は、ベレー帽にマドロスパイプが良く似合うレフエベル神父様が、慣れない日本語ながら、いつもにこやかな笑顔で、私たちに接してくれた。ミサの前には必ず公教要理の勉強会があり、段々と信者も増えてきて、団体名を「愛徳会」に改めるまでになった。特に小林有方司教様のお勧めで「レジオマリエ」も

結成、その会長も大橋さん、副が私で、妻の知子が書記という陣容で、そうした組織的な布教活動の甲斐あって、盲人信者だけの「オジリア会」や「フランシスコ第三会」も誕生したのであった。

カナダの神父様たちは、母国に募金と呼びかけて、私たちのために、昭和32年には聖堂を、そして同39

09年の「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」制定により、誤りが正されましたが、療養所に入所されている方々の高齢化が進むなかで安心して余生を送ることが出来るよう、差別偏見や隔離政策で苦しんだ多くの人の人生が無かったことにされないようにするため、多くの課題が残っています。



司教に答申を手渡す園部氏

仙台教区には2か所の国立ハンセン病療養所(青森県の松丘保養園、宮城県の東北新生園)があり、カトリックの「松ヶ丘教会」

「新生園教会」があつて、入所されている信徒の信仰の拠り所として長い歴史を歩んできています。

2008年8月、平賀司教様より「カトリック仙台教区がハンセン病問題にこれまでどのように取り組んできたかを検証し、今後どのように取り組むべきかを検討する」よう諮問された私たち委員会は、

まず日本カトリック司教協議会の2004年の見解「明治時代以降、カトリック関係者がハンセン病患者のために献身的な働きをしてきたと同時に、ハンセン病に対する間違つた見方により、「らい予防法」の廃止を遅らせ、患者への偏見と差別を温存助長さ

たこと、結果的に教会としてハンセン病患者者を隔離・絶滅するという国策に加担してしまったことを反省し、人権侵害と差別の根絶、ハンセン病問題の全面解決に向けて努力する」を出発点に、療養所や教会を訪問し、お話しを伺い、資料から学び、支援団体と共に活動しながら、「松ヶ丘教会」と「新生園教会」の歩みと教区の関わりなどについて検証しました。

答申では、国の隔離政策が誤ったものであり、再びこのようなことが起きないようにするための学び、社会が無関心でいた時にハンセン病療養所で生活しておられる方々を深い信仰をもつて支えた司祭や信徒がいられたことを教会の歴史にしっかりと留めること、療養所で暮らしておられる方々を兄弟姉妹として可能な限り共に祈り交わりの時間を持つことを、教区として取り組むよう提案しています。

仙台教区人権を考える委員会

委員長 園部 英俊

司祭異動

(一) 内は前職・前任地
第1次司祭派遣人事(1月10日付)

第2地区担当司祭

ゲストヴェオギャリー(淳心会)

八戸塩町教会居住

(移住移動者責任者)

第4地区担当司祭

ガクタン エドガル(淳心会)
移住移動者責任者兼任
大船渡教会に居住

引退

横島健二(教区司祭)

司祭の家に居住(第2地区担当)
第2次司祭派遣人事(4月1日付)

教区本部

小野寺洋一(教区司祭)

司教総代理兼任で第6地区担当司祭

司祭館に居住(第6地区協力)

小松史朗(教区司祭)

教区事務局長、教区会計兼任で

第5地区協力司祭

司教館に居住(第5地区協力)

第5地区協力司祭のま

土井勝吉(教区司祭、司祭の家

居住(司教館に居住)

第7地区担当司祭

ボルデユクシャル エメ

(ケベック外国宣教会

野田町教会に居住

(第6地区担当)

パウエレットマス(ドミニコ会

松木町教会に居住

(野田町教会に居住)

ドミニコ会本部(東京)へ転出

ガイドムスキエジ(ドミニコ会

(第7地区・松木町教会に居住

2015年9月まで

松木町教会手伝い

仙台教区「新しい創造」…第3期の取り組み

石巻ベースでの活動

カリタス石巻ベースは一階オープンスペースの開放、仮設住宅でのお茶っこ、近隣花壇の整備等が主な活動内容になっています。

仮設住宅では復興住宅へ移る方々が少しずつですが増えてきました。カリタス石巻ベースが関わっている仮設住宅のまとめ役だった方が引越され「これからもお茶っこに来てくれるんだよね。」と不安そうに尋ねる方もいらつしやいます。復興住宅の新しいコミュニティ作りが注目されていますが、先の見通しがつかずに仮設住宅に残る方もいらつしやいます。どちらも大切な存在です。今後は行政、社協、他団体と協力しながら関わりを模索していかなければと思っています。



お茶っこタイム



オープンスペースでの餅つき

一階オープンスペースの利用者は、近隣や仮設住宅の住民さんなどほとんど常連さんですが、石巻市の復興のために転勤でいらした方が最近利用されるようになりました。お互いに地元出身ではない共通点があり「石巻市の復興支援とは？」の話題で熱く語り合ったこともあります。難しさを感じながらも「支援することは一方的ではなく共に歩むこと」とお互い分かち合うことができて嬉しく思いました。

1月は新年会をかねてオープンスペースでお餅つきを行いました。ほとんど経験のないスタッフが言い出したことですが、町内会の方々に助けられ楽しい時間を過ごすことができました。本格的なお餅つきは久しぶりというところもあり、大勢の方々が集まり中には初

カンボジア・ステンミエンチャイ地区での活動報告⑦

元寺小路教会 小野 武

めてベースを利用される方との出会いもありました。カリタス石巻ベースは地域のコミュニティセンターの役割を担いながら地域の方々とともに笑い、泣く仲間としてこれからも関わりを大切にしていきたいと願っています。(Sr.細谷)

今回は、子どもたちのお母さんたちにセミナーを開始したことについてご紹介します。

「母親センター」の誕生

子どもたちの親は、ゴミ山からアルミ缶やペットボトルを拾い現地で売却するほか、家庭に持ち込んで分別作業をしています。そのため、とても

忙しくて子どもたちの教育を心配する余裕がありません。むしろ、勉強より手伝いをする子が親にとって良い子なのです。また、食事でも空腹を満たすことが先決になり、栄養バランスが偏り、子どもの発育が芳しくなく、栄養疾患による皮膚病の子がいます。さらに、住居が低

湿地にあり、トイレがなく、生活排水が流れない劣悪な環境となっています。でも、ここに住んでいる人は、この環境に慣れ親しんでいて、劣悪とは思っていないのです。そこで、私たちは、押しつけではなく、お母さんたちが自ら気付く場が必要との結論と



2階建ての母親センター

なりました。支援いただく団体がよくよく見つかり、お母さんたちの学びの場として「母親センター(2階建て)」を建てることができました。

「母親センター」150世帯のお母さんたちが、初めてのセミナーを体験しています。

「母親センター」は、子どもたちの学校に隣接しています。教育の必要性を身近に感じてもらおうのにふさわしい場所です。

「家庭の栄養改善」

「三大栄養素」でもお母さんたちは文字が読めません



ジグソーパズルで勉強

収入創出に向けた「ババヘラアイス」の工場建設 保育所も設置

学校での昼食は、牛乳毎日と肉・魚・卵・野菜をバランス良く取り入れ改善を図りました。でも、家庭での食事が大切です。そこで、限られた食費の中でも栄養素を考えた食事を作るようセミナーを開始しました。カンボジアでは、栄養に関して学ぶ場がありません。お母さんたちは、初めて聞くお話です。三大栄養素

①タンパク質②炭水化物・脂質③ビタミン・ミネラルがどんな食物に多く含まれているか、また、その栄養素が足りなくなるとどうなるかを学びます。文字の読めないお母さんたちに、飽きないよう絵とジグソーパズルを使い、遊び感覚で学べるようにしています。

サナダムシ・回虫・ハエ・蚊・風…日本の終戦直後と同じ

水道がなく、雨水や貴い水に頼っているため、水が貴重で手を洗う習慣がありません。野菜・魚・肉には、ハエが群がっています。水たまりがあるので蚊が沢山います。シラミは、ほとんどの子どもにいます。そこで、サナダムシ・回虫・ハエ・蚊・風を媒介として体力の弱い子どもたちが病気になることを学んでい

ます。熱を通せば大丈夫。夫との思いを改め、調理前に手洗いと材料を洗うよう勧めています。

収入創出に向けた「ババヘラアイス」の工場建設 保育所も設置

ゴミ山での仕事から脱却して収入を得ることが出来るよう、秋田の男鹿にあるババヘラアイス(お婆さんがヘラでアイスをコーンに盛る)進藤冷菓の技術協力で暑いカンボジアで製造し、お母さんたちが販売を始めました。そして、お母さんが働きやすくなるため、託児所を設置しました(朝6:30~夜6:00)。(続く)

元旦のミサ

1月1日 元旦ミサの塩釜教会です。

侍者が整揃いしました。小学1年生から大学3年生までの総勢7人の男子です。



塩釜教会 聖堂にて

小松神父もかつてはこの中にいらつしやいました。侍者の心意気が脈々とこの小さな教会に受けつなげております。

教会の宝です。 感謝です。

(塩釜教会)

殉教碑への巡礼

仙塩8教会の子どもたち

今年度で4年目を迎える「仙塩地区教会学校・子どもの祈りのつどい」は、10月と2月の年2回、仙塩地区8教会もち回りで開催されており、2月は毎年元寺小路教会が担当し、広瀬河畔に建つ深沢守三神父作の殉教碑に、徒歩で往復する巡礼を行なっております。



昨年は大雪のため参加者も少なめでしたが、2月11日（水・祝）午前に開催された今年のつどいは天候にも恵まれ、保護者も合わせて約60名、神父様も4

名が参加してくださり、これまでで最多の参加者となりました。仙塩地区の教会だけでなく、石巻教会や白石、亘理教会からもまた聖ドミニコ学院中高の生徒さんたちも参加してくれました。

まず元寺小路教会に集合した参加者は、オリジナルのパワーポイントを巡りながら日本のキリシタンの歴史を学びました。特に今年にはユスト高山右近の没後400年にあたることから、昨年のNHK大河ドラマの中の、主人公黒田官兵衛の受洗シーンや豊臣秀吉による伴天連追放令など、右近が登場する場面のダイジェストを見て、列福が期待されるキリシタン大名への理解を深めました。もちろん、右近没後9

年後の1624年2月に、伊達政宗の命によってカルワリオ神父様ら9名が広瀬川に沈められた殉教や、さらに来たる3月17日で150周年を迎える、長崎・大浦天主堂における信徒発見などについても学びました。

その後、広瀬通りを歩いて片道約2キロの殉教碑に巡礼し、森田直樹神父の司式で400年前の殉教者たちに祈りを捧げました「写真」。教会に帰った参加者は、元寺小路教会のリーダーたちが用意した温かい芋煮をお腹いっぱい食べ、心も体も暖まりました。

来年度以降も、2月11日に固定してこの巡礼を行います。子どもたちだけでなく、大人の参加も大歓迎です。（元寺小路教会・荒賀久仁夫）

仙塩8教会壮年の会

2月14日（土）、総会と懇親会に司教様と司祭5名、総勢32名が参加。



仙塩8教会壮年の会

奉献生活の年

2014・11・30～2016・2・2

ローマ教皇庁は、「教会憲章」及び「修道生活の刷新・適応に関する教令」公布50年にあたる2015年を「奉献生活の年」と定められました。これを受けて本誌では、奉献生活者の方々から、奉献生活における喜び、希望、福音宣教などについて日頃感じていらっしゃることを書いていただく欄を設けました。

第1回目としてラ・サール会 Br.ロドリゴさんにお願ひしました。



わたしの「奉献生活」①
ラ・サール修道会
Br.ロドリゴ・テレビニョFSC

「奉献生活の年」のために教皇フランシスコの手紙の内容から「感謝」「熱心」「希望」について考えてみたいと思います。修道者としても、カトリック信者としても、我々の社会・教会のために、私たち一人一人の召命・奉献生活が必要だと思ひます。高齢者・少子化・経済的厳しさ・大震災・不安等が増える社会を見ると心

が痛くなるほど厳しい社会です。ですから、そういう問題に対する積極的な取り組みが、奉献生活の中、信者生活の中に必要ですね。

修道会なら創立者のカリスマに忠実に生き、各奉献・使徒的生活の霊的の促進、また、全世界の信者たちに聖なる教会との交わりのうちに信仰・希望・愛徳を強めるために、この年は大きな機会である、と教皇フランシスコは教えてくれます。こんな恵みを受けることが出来るよう、喜びいっぱいこの年を生きていきます。

日本において皆様と共に迎えることができ、たいへんうれしく思います。

奉献生活は、教会の中心にあり、教会の使命の決定的な要素をなすものです。私たちは、この一年が、感謝、協力、支援、祈り、回心、そして霊的、宗教的な活動・努力の年となるように願っています。

「すべての人は、愛の完成の内に存在する聖性へと招かれているからです」。

（教皇ヨハネ・パウロ二世の言葉より）

東日本大震災復興支援チャリティーコンサート

バチカンより日本へ



祈りのレクイエム日本公演
3月20日(金) 18時30分開場
19時開演
会場 仙台白百合学園
レジーナパーチェスホール
全席自由 ¥5,000
チケット取扱い
● 仙台公演実行委員会
(仙台白百合学園 TEL 022-341-0884)
● 聖パウロ書院(元寺小路教会内)

●演奏曲 モーツァルト作曲 レクイエム全曲

●演奏 ロッシーニ歌劇場管弦楽団

演奏者の一人に仙台白百合学園在学中の高橋沙織さん(ヴァイオリン)がいます。彼女は、昨年3月11日にバチカンの聖パウロ大聖堂で開かれた“バチカンより日本への祈りのレクイエム”コンサートに東北代表として選ばれ、堂々たる演奏で会場を沸かせた。(パンフレットより)

＜ 教皇フランシスコからのメッセージ ＞

この計り知れない悲劇の犠牲になられた方々、そしてその影響で未だ苦しむ人々に無限の慈悲が与えられるよう神に祈ります。このコンサートが、最愛なる日本の人々と共に輝ける復興の象徴となることを、そして復興にご尽力されている方々の励みになることを希望します。

モンテリーズ機機卿による東日本大震災復興ミサ

時間：3月20日(金) 17:00～

場所：仙台白百合学園ロザリオのマリア聖堂

バス時刻 泉区役所向い発 15:30 から 18:00(30分毎)
学園発泉中央行 21:00 21:30(片道300円)



愛による解決を

いわゆる「イスラム国」に拘束された湯川遥菜さんと後藤健二さんが殺害された。残忍なこの事件は世界中の人々に衝撃を与えた。亡くなられたお二人の永遠の安息を祈ると共に、ご家族や彼らの友人・知人の悲しみに心をよせ、希望を失わないように神のあわれみと力づけを願いたい。

安倍総理は、「絶対に許すことが出来ない。彼らに償わせるために国際社会と連携して…」と発言している。

しかし、その方法でこの問題に決着をつけることで良いのだろうか。「目には目を…」では、悪の連鎖が拡大するだけだ。

犠牲になった2人もそんなことを望んではいないと思う。

むしろこれを機に、中東の格差と貧困等の複雑な背景を知ると同時に、今後、日本は世界とどのように連帯していくのか。

「平和憲法」のもとでの人道支援の在り方が問われているのではないだろうか。

地球を大事にする会 岩井 誠

マザー・テレサ展

「愛は微笑みから…」

告知板



3月6日(金)～18日(水) 10時30分～18時
会場 仙台縁日
仙台市青葉区中央2-1-18
クリスロード商店街内
Produced by 仙台放送
協力 沖守弘/NPO法人生活習慣改善センター
後援 朝日新聞社/産経新聞社/日本赤十字社/毎日新聞社
協賛 NPO法人フレンドシップ

第2回いのちの光3.15フクシマ

① 講演会 3月14日(土) 13時～15時30分
会場 元寺小路教会 大聖堂
演題 原発事故後を どう生きるか
講師 樋田 功(つただか)氏
NPO法人使い捨て時代を考える会
参加費 500円
(どなたでも参加できます)
② ミサ他 3月15日(日) 10時～14時
会場 原町教会
ミサ 10時
被災地の声
小高九条の会 志賀勝明氏
交流会
(参加申し込みは終了しました)

“アドリミナ” って何ですか？

司教日程(2頁)に、3月18日から27日まで「アドリミナ」と書いてあります。28日帰国と書いてあるので、どうも海外に行かれるようです。

「アドリミナ」は、日本の司教団が、使徒ペトロとパウロの墓を崇敬するためにバチカンを訪れ、教皇様とお会いして教区の現状を報告することで、5年ごとに行われます。これは、その国の教会の使徒的基盤を強め、司教団に属する他のすべての人々とのきずななど、ローマ教皇とのきずなを目に見える形で示す行事です。司教の教皇との個人謁見は一人15分となっていて、教皇は、最初に司教の担当教区を地図で確認した後、その教区の様子について報告をお聞きになります。



2007年教皇ベネディクト16世と謁見する平賀司教

第24回仙台ロコス公開講演会

「アナと雪の女王」にみる人間と聖書のメッセージ
Let it Go (恐れを超えて)

講師 武田なほみ氏(上智大学神学部准教授)

開催: 2015年2月8日(日)
会場: 北仙台教会 信徒館
出席者数: 54名

テーマは今非常に人気を博しているディズニー映画「アナと雪の女王」から、映画の原題は「フロズン」(氷に閉ざされしものとの意。ある北国に暮らす二人の女王の物語である。



武田なほみ氏

姉のエルサは妹思いの優しさと王位継承者としての自覚や分別を備え、しかし感情が高ぶると手のひらから雪や氷が吹き出す力が備わっている。それ故に完璧であろうとすること、ありのままの「私」では自分を受け入れられないとの思い込み、自分を受け入れないであろう他者への恐れ(信頼の欠如)、自分や周りを傷つけることへの恐れ、人を裁く心、自分の存在と居場所、あらゆる周りと関わりを拒絶する凍りついた心が孤独な氷の王国に閉じこ

もることとなる。やがてかつて優しかった姉を追いかけて国へ帰ろうと説得する妹アナの愛と友情と冒険の物語へと発展する。
エルサとアナ二人の女王を題材にしながら、単にディズニーのファンタジー物語と捉えることなく、私たち人間一人ひとりが真に「私」として生き、人との親しい関わりを築いて共に生きるとはどのようなことか。恐れによって凍りついた心はどのようなようにして温められ、柔らかな心になって再び生きられるのか。
エルサの孤独は現代の私たちにも投影し見る人に共感を呼ぶ。現代人の苦悩・求めているものは何か、凍りついた心を溶かすものは何か、恐れからの解放は何か。自分の欠点をもさらけ出し素のまま、ありのままの姿を包み込む、真実の愛とは何か。さらに突き詰めれば根源的に聖書のことばにつながる。聖書は「恐れることはない」(マタイ14章、ヨハネ6章等)と伝えている。
「恐れと真実の愛」について、現代人に問いかけて訴えかけるものがある物語として受け取ることができる。

参考図書: 「福音宣教」(オリ

エンズ宗教研究所・月刊誌) 2014年11月号64頁
(豊屋丁教会 山田 務)

計報

スール・エメ・マリア・ドウ・ジ

エズ・クルシフィ

エ. Op.

馬場 萬代子

ドミニコ会



ロザリオの聖母修道院(盛岡) 1933年2月5日生

1963年5月22日初誓願

2015年2月12日帰天 82歳

長年、会計係の職務を誠実に果たし、皆に信頼されていました。

お台所の当番の時など、アット

ト思うほどハイカラなお料理で私達を喜ばせてくれました。

また、冬の積雪の折、朝まだ

暗いうちから雪かきをしていました。

スール・アンチラ・マリア

玉川 ぬい子 Op.

聖トニコ

女子修道会



1926年10月15日 生

1963年7月16日 入会

1966年3月29日 終生誓願

2015年2月15日 帰天 88歳

東京、京都の学校・幼稚園で会計を勤めた。

縁の下力持ち的存在で、献身

仙台で生れ、仙台で帰天。

【訂正】

221号 訃報欄

(誤) 中島千代子

(正) 中西千代子

お詫びして訂正いたします。

新刊案内



マザーテレサ

来て、わたしの光になりなさい!

著者 マザーテレサ/発行 女子パウロ会/定価 2600円+税

皆さま方は、マザーテレサという言葉

を聞くと、どんなことを思い出されますか? ある人は、仙台に生まれ、講演さ

れたこと。またある人は、マザーテレサ

の貧しい人のなかでも、最も貧しい人への

奉仕に貫かれたその生涯。マザーが

ノーベル平和賞を受けた時のこと、

亡くなられた時のことなどを、思い出され

たかもしれません。

本書は、皆さまが挙げてくださった、

これまでのマザーのすばらしい業績がど

こからほとばしり出ていたのかを明かす

もので、本書の中で初公開された私的な

書簡はそれを明らかにしています。それ

は、マザーテレサの苦しみでした。

いつもほろえみを入々に撒きながら、明

るく、精力的に貧しい人々に奉仕してい

たマザーの外的な生涯からは、想像すら

編集後記

東日本大震災から4年、被災地

や被災された方々の暮らしにも

変化が見られますが、復興はまだ

まだです。支援の仕方も変わって

くると思われますが、「私たちは

忘れない!」ということが大切な

のでしょう。

教会は、四旬節に入り主の復活

をふさわしく迎えられよう

この期間を過ごしたいものです。

できない苦しみでした。

マザーが見た幻視の中で、イエスは彼女にこう語りかけました。「来て、来て、貧しい人のあばら家にわたしの光を連れていきなさい。来て、わたしの光になりなさい」と。その後、彼女はロレット修道会を去り、神の愛の宣教者を創立しました。しかし、すぐに彼女の心は暗闇に閉ざされてしまいました。信仰すら失ったと思ふほどの苦しみの体験でした。

霊的指導司祭の勧めは、「神に全面的に委ねなさい」というものでした。この勧めにしたがって、ただひたすら、闇をも神にささげ、イエスとの一致のうちに、神に身をささげたのです。彼女は、このように書き残しています。「この暗闇は、イエスが地上で味わった暗闇と痛みの一部だと信じます。イエスはもはや自分では苦しむことが出来ないで、地上にいる私のうちで苦しむことを望んでおられることに深い喜びを、今日ほんとうに感じました。今まで以上に、神に自分を委ねます」と。こうして、イエスの十字架上の苦しみを、その渴きをいやそうとひたすら自分をささげ尽くし、暗闇の聖人としての生涯を全うされたのです。

翻訳者の訳文も読みやすく、新たなマザーテレサの伝記が出版されたことは、うれしいことです。

教会の子どもたちが元気に過ごしている様子はうれしいことです(6頁)。

また、「奉獻生活の年」にあたって新しいコラムを設けました。

司教様は、アドリミナにお出かけになります。アドリミナが仙台教区と日本の教会に豊かな恵みとなるよう祈りながら、司教様の霊的なおみやげに期待しましょう。

原稿、情報を寄せてくださった方々に感謝申し上げます。(岩井)